

成城大学『経済研究』第 247・248 合併号抜刷（2025 年 3 月）

書

評

李恩民著

『中国華北農民の生活誌』

林 幸 司

李恩民著

『中国華北農民の生活誌』

林 幸 司

中国華北とはいかなる地域か。まず地理的概念から言えば、それは概ね黄河中・下流域およびその支流一帯を示し、河北・河南・山東・山西の四省を指すことが多い。この地域は古来いわゆる中華文明発祥の地の一つとして栄え、現在では、首都北京をはじめ、天津、石家荘などの大都市と、広大な農村を包含する一大経済圏となっている。他方、乾燥した気候や水不足、黄砂の浸蝕など、華北が危機的な自然環境に置かれていることもよく知られている。また、日中戦争が全面化した1930-40年代を中心に、日本の軍事侵略と支配が展開した地域でもある。このような華北地域にあって、「代々この地域で生活を営んできた一般農民の生活に焦点を当て、その姿を忠実に描いた」のが、本書である。

本書は xii + 162 頁よりなる。その構成は以下の通りである。

第一章 農民の結婚：通婚圏と社交圏

第二章 農民の子孫：一人っ子政策の実態

第三章 農民の健康：医者と医療

第四章 農民の移住：都会のための犠牲

第五章 農民の日本観：一九九五年

付録一：聞き取り調査実施データ

付録二：戦後日中関係の歴史と現状についての調査データ

第一章では、まず戦前および戦後の華北地域でおこなわれた農村調査の概要およびその経緯についてまとめられる。華北農村については、戦前期に南満洲鉄道株式会社調査部が各地における村落調査を行っており、その集大成として、『中国農村慣行調査』（全六巻、1952年～58年刊行）が刊行されている。これらは日本の中国侵略を背景として進められた調査という限界はあるものの、農民との応答をそのままの形で記録した貴重な文献であるとともに、華北農村がどのようなものであったのか、またそれがどのように変革したのか、という問題を考える上での、基本的文献資料となっている。1980年代以降、中国が対外的に開放されていくとともに、外国人の研究者が華北農村の実態調査に入ることが再び可能となり、多くの研究者がグループを組んで農村実態調査に取り組んだ。ここでは詳述を避けるが、そのうち東京では、故三谷孝氏（一橋大学名誉教授）を中心とする研究グループ「中国農村慣行調査研究会」による調査が相次いで行われた¹⁾。そもそも、日中民間経済交流に関する研究で知られる著者²⁾が、なぜ「農民の生活誌」をものすることになったのか。それは著者が華北農村出身であると言うだけでなく、中国農村調査研究の第一人者であった三谷氏の門下生として、中国農村調査に参加したことが大きく関わっている。著者は三谷氏の率いた農村調査の中で、現地での農村調査における中国側と日本側をつなぐ役割をも果たし、なくてはならない存在となった。さて、著者はこうした農村調査に参加する中で、調査テーマとしては当初村の婚姻に

-
- 1) その主な研究成果は以下の通り。三谷孝編『農民が語る中国現代史—華北農村調査の記録』内山書店、1993年。三谷孝編『中国農村変革と家族・村落・国家—華北農村調査の記録』汲古書院、1999年。三谷孝編『中国農村変革と家族・村落・国家—華北農村調査の記録』第二巻、汲古書院、2000年。三谷孝編『中国内陸における農村変革と地域社会—山西省臨汾市近郊農村の変容』御茶の水書房、2011年。
 - 2) 主著に、『中日民間経済外交 1945～1972』（人民出版社、1997年）、『転換期の中国・日本と台湾』（御茶の水書房、2001年）、『日中平和友好条約』交渉の政治過程』（御茶の水書房、2005年）、『対立と共存の歴史認識』（東京大学出版会、2013年）などがある。

ついて関心をもっていたといい、それが本章の後半の内容となっている。具体的には、満鉄調査部の農村慣行調査にも連なる調査地点である河北省樂城県寺北柴村の、婚姻にともなう移動の範囲を示す「地理的通婚圏」の分析をもとに、その通婚関係の変遷が検討される。その中で明確にされたのは、「同村少婚」「同姓不婚」の伝統が継承されている一方で、通婚ブロックが隣接郷へと拡大していること、そして媒酌婚の伝統がある一方で恋愛婚も出現していることである。華北の「農村らしき農村」の伝統がどこまで変革されたのかについて、自らの農村経験も踏まえた検討がなされており、興味深い。

第二章では、農民にとっての計画生育政策と生育観の変遷について、やはり寺北柴村を事例に検討される。同村における出生数が、中華人民共和国建国後大幅に増加し、それが計画生育政策を背景として1990年代に減少していくというのは、全国的傾向と合致するものである。ただし、同村における計画生育政策の厳格な執行については、様々な抵抗があったことが、本章の農村調査における幹部の証言の中で縷々明らかにされる。その抵抗の内実は、伝統的観念や貧しさから来る経済的負担の問題など複雑であったが、改革開放以降「貧村」からの脱却が志向される中で、その抵抗のあり方にも変化が生じていたことが露わになった。このように農民は、国家の政策に結果として順応していったわけであるが、計画生育政策が撤廃された現在、「今まで忠実に国家の国策にしたがい子供を一人しか産んでいなかった多くの人々はどのような思いでこの政策の激変を見ているだろうか？（46頁）」という著者の指摘は、農村における計画生育政策の問題に止まらない、現代中国の重い課題を想起させる。

第三章では、農村の医療の実態について、寺北柴村や天津市近郊農村、山西省臨汾市近郊農村などの事例をもとに検討する。人民共和国建国後、農村合作医療制度の創設により、農村における医療の普及率は高まった。1980年代初頭の集団経済体制の解体により、これが事実上崩壊し、農民

が医療サービスから取り残されたことは、よく知られているだろう。著者はまず農村の「医者」への聞き取りを通して、彼らの多くが農業などとの兼業であること、また医療技術よりも人間性や信頼性が重んじられ、「人望のある紳士的な存在である（63頁）」ことなど、農村の医者の実態を活写する。ただし、このように必ずしも専門性を重んじない農村医療は、農村で得てして多くの問題（例えば売血を通したHIV集団感染など）を引き起こした。ここで著者は、伝染病の防疫体制作りと新型農村合作医療制度の確立を、農村の医療を立て直すための喫緊の課題として強調する。農村医療の制度とその実態の乖離を描いた本章の分析は、著者の農村調査をもとにした分析の真骨頂であるとも言えよう。

第四章では、水資源開発と農民の移住問題について、いわゆる「南水北調」プロジェクトを中心に検討される。中国を大きく南北に区分するならば、亜熱帯や湿潤気候が多い南部には水資源が多く、乾燥地域が多い北部は逆にこれが少ない。南部の水資源を巨大な人口用水路を通して北部に流し、北部には水資源を、南部には治水をもたらそうというのが、「南水北調」プロジェクトの骨幹である。計画自体は人民共和国建国後の1950年代からすでに存在したが、2000年代に入って急ピッチで実現化した。そして「南水北調」は、長江三峡ダム建設のみならず、広く西部地域全体の開発にまで影響が及ぶ、一大プロジェクトとなっていくのである。著者も指摘するように、黄河など大河の断流や生活用水の汚染など深刻な水不足に悩まされている華北農村において、経済開発のみならず「人間の生存（91頁）」という視点からも、「南水北調」のもたらす効果への期待は大きい。他方、「南水北調」が長江流域の生態環境や住民への甚大な影響を及ぼすという点も無視できない。「大規模なナショナルプロジェクトを挙国一致体制で行い、それによって国全体を豊かにしようという方法は従来からの発展途上国の社会開発のあり方と同じ」であるものの、そのために多くの住民が「非自願移民（自由意志ではないが移住せざるを得ない住民）」として居住地を

迫われることになるのである（99頁）。華北農村出身の著者は、農村調査を経て水不足の深刻さが骨身にしみていることもあり、その意味で「南水北調」プロジェクトに大きな期待を寄せるが、一方で「開発の影で故郷離れ・親戚離れの犠牲を強いられている多くの農民が本当に豊かになれるか（100頁）」とも述べている。著者のこうした一見矛盾しているとも取れるまなざしは、他の章における検討とあいまって、中国全体の発展の方向性を考える上で重要な問題を投げかけている。

第五章では、著者が1995年前後に河北省欒城県でおこなった聞き取り調査と、山西省太原市および運城市でおこなったアンケート調査の事例をもとに、農民が日本に対してどのような意識を持っているのかが扱われる。著者が指摘するように、中国の新聞やテレビなどは中国共産党の代弁者として運営されている以上、農民の日本に対する知識が限定的にならざるを得ないのは無理のないことである。日本の戦争賠償問題に対する無関心や、軍国主義復活への警戒感、そして日中国交正常化やそれへ至る具体的過程についての無知などは、その表れであるとも言えよう。著者の調査結果で目を引かれるのは、「日の丸」に対して反感や負の感情を9割近くの人々が持っている一方で、経済関係の発展に6割以上の人々が期待しているという点である。この調査結果は、右肩上がりに経済成長が続いていた時期のステレオタイプの認識ともとれる一方で、「庶民生活の向上をいっそう図ることが、一般民衆の最大の願望である（138頁）」ことを雄弁に物語っているだろう。本書において著者がもっとも強調したかったのは、このような肌感覚なのかもしれない、と評者には思われた。

評者は農村変革問題に関する研究を志して（結局挫折して銀行史研究に向かうこととなったが）三谷ゼミの門をたたき、本書の随所で取り上げられた農村調査の末席に加わったこともある。その中で、評者は著者の李恩民氏から、中国農村における民衆との付き合い方の多くを教わったが、一方で

「日本人の調査に加わる中国人」としての気持ちをうかがったことはなかった。様々な視点や意識が交錯する本書を通読すると、著者が複雑な背景や問題意識を抱えつつ調査に参加していたことが改めて理解でき、まさに汗顔の至りである。日中関係が闊達さを失い、以前のように自由な交流ができなくなってしまった昨今、本書の内容がますます重要になると感じるのは、評者だけではあるまい。ぜひ読者諸賢にご一読頂きたい。

(御茶の水書房, 2019 年, xii + 162 頁, 4200 円 + 税)